



Title	韓国語と日本語における聞き手待遇法の対照研究 : 動詞の終結語尾を中心に
Author(s)	朴, 正恩
Citation	大阪大学言語文化学. 1992, 1, p. 135-144
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78207
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

韓国語と日本語における聞き手待遇法の対照研究

—動詞の終結語尾を中心に—*

朴 正恩**

한국어와 일본어에 있어서 대우표현은 두 언어를 특징짓고, 언어코뮤니케이션에 아주 중요한 역할을 하고 있다. 대우표현의 사용법에 있어 양국어에 어느 정도 공통되는 점이 있다고 하여, 실제 학습자들은 서로 다른 점을 주의하지 않고 잘못 사용하거나 잘못 이해하여, 언어코뮤니케이션의 트러블이 생기는 경우가 자주 있다. 한편으로 그러한 트러블로 인하여 학습자들은 비로소 문화의 차이를 느끼기도 한다.

본 논문의 목적은, 현대 양국의 언어생활에 있어서 일련의 대우표현이 어떤 체계를 가지고 있으며, 인간관계나 경우에 따라서 어떻게 사용하고 있는지 양국어를 대조하면서 그 언어문화적 배경을 파악하려는 것이다.

청자대우법의 체계는, 한국어의 경우, 지금까지의 제연구를 검토한 결과, 단지 대우의 대상이 손위인지 손아래인지에 따라서 존대(尊待)와 하대(下待)로 분류한 것은 대우의식(또는 敬意)은 전혀 생각하지 않은 너무나 단순한 분류 방법으로, 앞으로 좀 더 세밀한 연구가 필요하다고 생각한다. 일본어의 경우, 대우표현의 분류에 있어서는 그 기준을 人称・敬意의 性質・敬意의 対象으로 명확하게 설정하고 있다. 주로 경어를 중심으로 한 분류가 많이 보이고 대우표현으로써의 비경어까지 범위를 넓힌 것은 비교적 적다. 실제 두 언어의 청자대우표현을 대조해 보면, 일본어의 경우, 부모님과 선생님에 대한 대우표현에 있어서, 親疎의 요인이 작용하고 있는 것을 확인하고, 한국어의 경우는, 아버지와 선생님에 대해서는 최고의 대우를 한다고 하는 관습적 요인과 親疎의 요인이 복합적으로 작용하고 있음을 알 수 있었다.

1はじめに

韓国語と日本語の待遇表現は、両言語を特徴づけるものであり、言語コミュニケーションにおいて、非常に重要な役割を果たしているものである¹⁾。その待遇

*A Comparative Description of Hearer Honorification in Modern Korean and Japanese (朴 正恩)

**言語文化研究科博士後期課程

¹待遇法(または待遇表現)という用語は、「言語コミュニケーションにおいて、話し手が聞き手または第三者との何らかの人間関係に基づいて、その時の場面にふさわしく用いる言語

表現の使用においては、ある程度共通した点が認められるために、実際学習者は異なった点に注意をはらわず誤りをおかしがちである。またその誤りをおかすことにより、コミュニケーションのトラブルが起こったりして異文化を感じるのである。

この論文の目的は、現代両国語（標準語を中心に）の言語生活における一連の聞き手待遇表現はいかなる体系を成すか、また、人間関係や場合によってどのような待遇表現の使い分けが見られるかを、両言語を対照することによって明らかにし、ひいてはその言語文化的背景を把握してみようという点にある²⁾。

2 聞き手待遇法

2.1 韓国語の待遇表現の体系

韓国語の聞き手待遇表現は話し手が聞き手との関係によって用いる表現である。先行の諸研究の現代語に関する待遇表現体系の分類においては、次のように、大体尊待と下待に大きく2つに分け、更に6つに分ける場合が多い。その6つの分類は一般に“**하다** (hada, する)”という動詞の命令形をそのままとったものであって、尊待として“**하십시오** (habsho) 体・**하오** (hao) 体・**해요** (heyo) 体”があり、下待として“**하게** (hage) 体・**헤라** (hera) 体・**헤** (he) 体”がある。この待遇表現の6つの形を大きく尊待と下待に分けた基準となるものは、大体話し手と聞き手の間の年齢・社会的地位・職場の職位・親族関係の序列などの諸条件において、少なくとも同等以上の人に用いるか、同等以下の人に用いるかによるものである。しかし、実際の言語生活で話し手がいずれかの待遇表現を用いる際に、外面的諸条件にだけでなく、内面的な話し手の心理的要因や場面によってもかなり影響されるということを見逃してはならない。その代表的な例として、“**하게** (hage) 体”と“**하오** (hao) 体”があつて両方とも話し手が目上の聞き手に対しては用いないことは確かな事実であるが、同等以下の聞き手であっても“**헤라** (hera) 体”や“**헤** (he) 体”を避けるのは、話し手の心理的要因が働くからである³⁾。

表現である」と定義して使うことにする。

²⁾韓国語の標準語：ソウルの中流の階級の琢磨・補正したものをいう。(李熙昇編『国語大辞典』ソウル：民衆書林、1986年) 日本語の標準語：東京方言に基盤を置き、各地方言に対して全国の共通語として用いられ、国語を代表するものと考えられている言語をいう。(尚学図書編『国語大辞典』小学館、5刷、1982年)

³⁾具体的な例は2.3の口・ハ)を参照。

一方、待遇表現の分類モデルである命令形は、形式的な主従関係や上下関係がはっきりとされているが、話し手と聞き手の心理的關係に基づく待遇意識は考慮されていない。

それ故にこの論文では、待遇表現の分類モデルとして命令形より聞き手とのコミュニケーションの出発である疑問形を用いることにした。また徐正洙(1980)の分類法をおもに参考にして諸用語を使い、待遇の対象と待遇意識に基づいて、次のような待遇表現の分類をもって日本語と対照していきたい。

図式1)⁴⁾

尊待	~ 십니까 (シムニカ) ~ 세요 (セヨ)
常待	~ 습니까 (スムニカ) ~ 아 / 어요 (ア/オヨ)
礼遇	~ 시오 (シオ) ~ 는가, 나 (ヌンガ、ナ)?
非尊待	~ 아 / 어, 니 (ア/オ、ニ)?

2.2 日本語の待遇表現の体系

日本語の待遇表現の体系に関しては、ほとんど敬語を中心に研究されている。したがって、敬語のみではなく、待遇表現という考え方に基づいて全体的に分類したものは極めて少ないのである。勿論、敬語だけでも分類基準によってさまざまな分類法があるし、より適切に分類するのは実にむずかしい問題であろうと思われる。まず敬語体系と待遇表現体系に関する諸研究を簡単にみていきたい。

1. 敬語体系を記述するためにはまずはじめにその分類の基準がなければならない。敬語分類の基準は人称を主にするか対象を主にするか、あるいはまた敬意の表し方を主にするか等によって行われている。先行の研究者達がこの3つの基準のいずれを中心に分類したかを示すと以下のとおりである。

⁴⁾ 尊待と非尊待は徐正洙(1980)を参考にした。常待は尊待表現より待遇意識の度合いがやや低く、一般に年齢の差が少なくまだ親しくなっていない場合に、あるいはある程度の距離を置きたい場合に用いられる。礼遇という用語は朴勝彬(1931)に見られるが、その捉え方が異なる。筆者は、礼遇表現を話し手が同等以下の聞き手に対してある程度の礼をもって待遇しながらも親しみを表すという点で、尊待表現の待遇意識とは区別している。一方この図式は聞き手が主語となる場合に限る。

人 称	三橋要也 (他称敬語・自称敬語) 山田孝雄 (敬称・謙称) 石坂正蔵 (敬語的自称・敬語的他称・敬語的汎称)
敬意の性質	吉岡郷甫 (尊敬・謙讓・丁寧)
敬意の対象	松下大三郎 (主体尊称・客体尊称・所有尊称・対者尊称・支配尊称) 玉上琢弥 (為受尊敬・受手尊敬・聞き手尊敬・自己卑下) 三矢重松 (尊他敬語・自卑敬語・関係敬語・対話敬語) 時枝誠記 (詞に属する敬語・辞に属する敬語) 辻村敏樹 (素材敬語・対者敬語)

大体2～4つに分類しているが、敬語体系の分類において現代に至るまでもっとも大きな影響を及ぼしたのは、時枝誠記(1941)の“辞に属する敬語”と“詞に属する敬語”である。その“辞に属する敬語”とは聞き手に対する敬語で、いわゆる丁寧語とのことであり、“詞に属する敬語”とは話題になる事柄について用いられる敬語で、いわゆる尊敬語と謙讓語のことである。しかし、今日もっとも一般的な敬語体系としては、尊敬・謙讓・丁寧の3つに分類する方法をとっていると言うことができ、分類法がいかなるものであってもその3つの用語に当てはめて理解しようとする傾向がある。

2. 待遇法に関する分類は、前述のように極めて少ない。待遇法の用語を用いて分類した研究者には、水谷静夫(1956)、大石初太郎(1976)、西田直敏(1988)等があげられる。2.3では、主に次の西田直敏(1988)の分類法を参考にしながら両国語の待遇表現を対照することにしよう。

敬体：話し手が相手を自分より上位の者と位置づけたことを示す単語と文法形式など。上役←下役、先生←生徒、父母・おじ・おば←子供、上層部に位する人←下層部に位する人

常体・非敬体：話し手が相手を自分と対等または自分より下位の者と位置づけたことを示すために用いる。

2.3 両国語の待遇表現の対照

両国語に待遇表現があると言っても、以上のように、その分類法は異なるのである。ここでは待遇表現の対照についての理解を深めるために日本語の場合は西田直敏の分類法を対照のモデルとして引用することとする。韓国語の場合は、図

式1)の分類法を用いることとし、両言語を対照してみると、次のような図式が得られる。

図式2) ⁵⁾

筆者の分類		西田直敏<1988>の分類	
尊待	~ 십니까 (シムニカ) ~ 세요 (セヨ)	敬体	お~になりますか ~られますか
常待	~ 습니까 (スムニカ) ~ 아 / 어요 (ア / オヨ)	常体	~ますか、~ですか
礼遇	~ 시오 (シオ) ~ 는가, 나 (ヌンガ、ナ)?	非敬体	~の、~のか、~か
非尊待	~ 아 / 어, 니 (ア / オ、ニ)?		

韓国語の尊待表現は日本語の敬体表現に、常待表現は常体表現に、礼遇表現は場合によって常体・非敬体表現に当たると言えよう。それでは、上のような待遇表現は場面に応じてどのような表現が用いられているのか例文を通してみることにしよう。例の場面は家庭・学校またはそれ以外に分けて設定することにする。

例1) 子供⁶⁾ → 大人⁷⁾ (小学生 → 父母、担任の先生)

イ) 子供が父母に”何時に帰ってくるか”を聞く場合

日本語の場合	韓国語の場合
子供 → 父親	
お父ちゃん、何時に帰って <u>クルノ</u> ? (非敬体)	아빠 (아버지) , 몇시에 <u>들어와</u> ? (非尊待) 아빠 (아버지) , 몇시에 <u>들어와요</u> ? (常待)
子供 → 母親	
お母ちゃん、何時に帰って <u>クルノ</u> ? (非敬体)	엄마 , 몇시에 <u>들어와</u> ? (非尊待)

⁵⁾ 日本語の敬体表現には、イルーイラッシャル、タペルーメシアガル等のような特別の形の動詞を含む。また非敬体表現は動詞の原形を基準とする。

⁶⁾ 話し手→聞き手

⁷⁾ 大人の意味は、両国語とも、子供の相対的意味として成長した一人前の男女という場合と、分別をわきまえていることをいう場合もあるが、本論文での大人は、前者の意味として使うこととする。

ロ) 子供が先生に “何時頃帰るか” を聞く場合

日本語の場合	韓国語の場合
子供 → 先生	
先生、何時頃帰リマスカ？ (常体)	선생님, 몇시쯤에 <u>가요</u> ? (常待)
先生、何時頃帰ルノ？ (非敬体)	선생님, 몇시쯤에 <u>가세요</u> ? (尊待)

子供の大人に対する待遇表現は、韓国語の場合、一般に尊待や常待表現を用いるのが普通である。しかし、大人でも親しい関係かまたは親しみをを感じる場合であれば、非尊待表現を自然に用いる場合もある。

イ) の例をみると、父母に対する待遇表現は家庭によって多少差はあるが、日本語の場合は、子供にとって父母は、年齢的に上位者にありながらも親子であるという親しい関係が優先されて非敬体表現が用いられている。一方、韓国語の場合には、父親に対しては常待・非尊待表現が用いられているが、母親には非尊待表現を用いている。このような現状は従来韓国の家父長制度の影響で、家庭内の父親の位置は母親の位置より上位であったが時代の変遷に伴ってこのような考え方が徐々に薄まれてきた結果、幼少期においては父親に対して親しみを表す非尊待表現を用いる傾向が生じたということを示している。

ロ) の先生に対する待遇表現は、日本語の場合、子供が先生と親しい(親しみをを感じる) 場合は非敬体表現が用いられるし、そうではない場合は常体表現が用いられている。韓国語の場合は、いずれの場合も尊待と常待表現が用いられている。従来韓国社会における先生は、儒教思想の君師父一体の影響で、君主、父と同等に絶対的な尊待表現をもって待遇すべき対象であった。現代、イ) のように父に対しては、少しずつ変わっていく状況もみられるが、先生に対してはまだまだそのような考え方が根深く残っているとも言えよう。

例2) 大人 → 子供

イ) 父母が子供に “いつから学校に行くか” を聞く場合

日本語の場合	韓国語の場合
いつから学校へ行クノ？ (非敬体)	언제부터 학교에 <u>가니</u> ? (非尊待)

ロ) 先生が子供(田中幸子、金英姫)に “鉛筆を持っているか” を聞く場合

日本語の場合	韓国語の場合
幸子さんは鉛筆を持って <u>イマスカ?</u> (常体)	김영희는 연필 가지고 <u>있어요?</u> (常待)
幸子ちゃんは鉛筆を持って <u>イルノ?</u> (非敬体)	영희는 연필 가지고 <u>있니?</u> (非尊待)

例2) は大人の子供に対する待遇表現で、両国語とも一般にインフォーマルな場面では親愛感を与える非尊待と非敬体表現が用いられている。但しロ)のように教育の場である学校やフォーマルな場面では常待や常体表現が用いられる場合もある。

イ) の親子関係の場合、その関係はいつまでも変わらないから、子供が大人になっても親は非尊待と非敬体表現を用いる。以上、両国語とも子供に対しては、年齢的下位者だからというより親愛感をもって待遇する傾向が強いということがわかる。

例3) 話し手と聞き手が大人同士の場合で、人間関係が複雑であり、年齢・職位・社会的立場(親子関係、先生と学生の関係、後輩と先輩の関係、男女関係、商売の売り手と客の関係など)、または親疎の要因や場面によって待遇表現は変わっていく。話し手が待遇表現を選択する際に、諸要因が複合的に働いているということは周知の事実であるが、それらの要因の中で、最終的に影響を及ぼす要因は何であるのかをみていきたい。

例3) 大人 → 大人

イ) 子供(20・30代)が父母に”どこかへ出掛けるか”を聞く場合

日本語の場合	韓国語の場合
子供(男) → 父親	
お父さん、どこかへ <u>行クノ?</u> (父さん、お父ちゃん)(非敬体)	아버지, 어디 <u>나가십니까?</u> (尊待)
	아버지, 어디 <u>나가세요?</u> (尊待)
	아버지, 어디 <u>나가요?</u> (常待)

日本語の場合	韓国語の場合
子供（男） → 母親	
お母さん、どこかへ <u>行クノ</u> ? (母さん、お母ちゃん) (非敬体)	엄마 (어머니), 어디 <u>나가세요</u> ? (尊待)
	엄마 (어머니), 어디 <u>나가요</u> ? (常待)
	엄마, 어디 <u>나가</u> ? (非尊待)
子供（女） → 父親	
お父さん、どこかへ <u>行クノ</u> ? (父さん、お父ちゃん) (非敬体)	아버지 (아빠), 어디 <u>나가세요</u> ? (尊待)
	아버지 (아빠), 어디 <u>나가요</u> ? (常待)
	아빠, 어디 <u>나가</u> ? (非尊待)
子供（女） → 母親	
お母さん、どこかへ <u>行クノ</u> ? (母さん、お母ちゃん) (非敬体)	엄마, 어디 <u>나가요</u> ? (常待)
	엄마, 어디 <u>나가</u> ? (非尊待)

家庭内において、日本語の場合は、子供が大人になっても依然として親に対して非敬体表現を用いる。また性別にも影響されない場合が多いようだ。しかし、韓国語の場合は、子供が大人になれば性別によって、親に対する待遇表現が少々違っていく。というのは、子供が大人になっていくことによって親も年をとっていき、また大人は、完全な一人の人格体として認められる故に、それに準ずる言葉使いをせねばならないという考え方があるからである。まず男も父親に対する呼称が **아빠** (apa, お父ちゃん) から **아버지** (abeoji, お父さん) に変わり、非尊待表現が用いづらくなっていく。しかし母親に対しては、呼称が少しは変わるが、一般に家庭では **엄마** (eomma, お母ちゃん) が多く用いられ、外では、**어머니** (eomeoni, お母さん) が多く用いられている。女の場合、大人になっても父親に対して、まだ親愛感や甘えを表す非尊待表現を用いる傾向が多少見られる。母親に対しては男のように尊待表現は用いないのが普通である。結局、家庭内での親に対しては、

日本語の場合子供の年齢とは関係なく非敬体表現が用いられるが、韓国語の場合は、長幼有序の慣習の影響、さらに話し手と聞き手の性別や年齢によって待遇表現が異なり、尊待・常待・非尊待表現が用いられている。

ロ) 教授(40代以上)が大学生(20代以上)に“今日発表する番か”を聞く場合

日本語の場合	韓国語の場合
君が今日発表する番 <u>デ</u> スカ? (常体)	<u>자네가 오늘 발표할 차례 인가?</u> (礼遇)

ハ) 義母が婿に“ひとりで来るか”を聞く場合

日本語の場合	韓国語の場合
～さん、ひとりで来 <u>ラ</u> レマスカ? (敬体)	<u>자네 혼자 오는가?</u> (礼遇)

ロ)・ハ)の場合は、年齢的な上下関係が明確な上位者が下位者に対する待遇表現である。日本語の場合は常体と敬体表現が韓国語の場合は礼遇表現が使われている。ロ)の場合は師弟関係で十分に非尊待表現をもって待遇してもいいようであるが、一人前となった大人であるとして弟子であっても子供のような待遇はできないのである。

ハ)の場合、義母と婿の関係は距離感を感じる関係であることは両国語とも同様であるが、その待遇表現は異なるのである。日本語の場合は婿に対する呼び方(～さん)さえも敬体表現が用いられている。しかし、韓国語の場合は聞き手が下位者であるから尊待や常待表現は用いられていないし、一方子供でもないから非尊待表現もまた用いられていない。こういう場合、的確に用いられるのが礼遇表現である⁸⁾。すなわちハ)の礼遇表現は、聞き手の年齢を問わず既婚者であるからそれに準じながらも聞き手に親密感を与える待遇表現として用いられている。

⁸⁾この礼遇表現は、大人同士で上位者が下位者に対して用いる。しかし待遇意識面から考えると非尊待表現を用いていいような場合でも、それを避けてある程度の礼をそなえながら親愛感を与えるため、下待と分類しがたいと思うのである。これを日本語の待遇表現に对照するのは他の待遇表現より苦しい。使われる対象が限られていて頻度は低いが、韓国語の待遇表現の中で特徴のあるものとして興味深い。

3 おわりに

韓国語と日本語における聞き手待遇表現について、動詞の終結語尾を中心に前半部では、現代両国語の言語生活における一連の聞き手待遇表現はいかなる体系を成すかを整理し、後半部では、人間関係や場合によってどのような待遇表現の使い分けが見られるか、また、その使い分けの諸要因(年齢・親疎・場面など)がどのように働くかをみることによって、それぞれの言語文化の背景を概括してきた。

一方、聞き手待遇表現の分類に関して、韓国語の場合、まだその基準がはっきりと設定されていない段階で多少の難点があったが、伝統的分類基準として形式的関係の上下にだけこだわるのは現代言語生活を把握するのに単純すぎる点があり、筆者は待遇意識をも考えた上で図式1)が得られた。

日本語の場合は、待遇表現の分類においては、その基準を人称・敬意の性質・敬意の対象の3つに明確に設定している。そして、主に待遇表現の一部である敬語を中心とした分類が多くみられ、待遇表現として非敬語まで範囲を広げたものは比較的少ないようだ。本論文の図式2)をもって、両国語の聞き手待遇表現の全体的な把握までは至らなかったが、現在両国語の聞き手待遇表現の対照研究の初期段階としての意味をもち、今後より詳しい研究が必要であろう。

参考文献

- 徐正洙「존대말은 어떻게 달라지고 있는가 (2) -성자대우등급의 간소화-」(한글学会「한글(ハングル)」167, 1980年, pp.3-33.)
- 大石初太郎「待遇法の体系補説」(専修大学国語国文学会「専修国文」20, 1976年, pp.191-206.)
- 時枝誠記「第五章 敬語論」(岩波書店「国語学原論」1941年, pp.430-501.)
- 西田直敏「知っておかなければならない敬語のルールは」(学燈社「あなたも敬語が正しく使える」1988年, pp.28-49.)
- 水谷静夫「敬語の本質と原理」(至文堂「国文学解釈と鑑賞」31-5, 1956年, pp.1-5.)